

当事者概念の理論的更新のために

—訪問介護のエピソードを通じた実践的考察—

社会システム研究科地域コミュニティ専攻

2024M30004 埴生明

要旨

本研究は、現代日本で一般化した当事者概念を批判的に再検討し、障害者運動に由来する「自己のニーズを表出し主体的に語る存在」を中心とした枠組みが、表出困難な人々を不可視化してきた点に着目し、その再構成を試みるものである。先行研究として上野千鶴子の当事者概念を分析し、「ニーズの顕在化」を中核に据える理論が、「潜在的当事者」や関与する「派生的当事者」との関係性を十分に捉えきれていない限界を明らかにした。方法として、表出行為に依拠しない当事者性を捉えるため、重度重複障がい者 K さんの在宅介護現場における関与観察を行い、非言語的反応や沈黙、関係の中で生起する出来事を分析した。その結果、当事者性は個人の属性や発話能力によって固定的に決まるものではなく、関係的实践の中で動的に生成されることが示され、「当事者／非当事者」という二項対立を超え、語る主体ではなく、他者を招き入れながら関係の中で立ち現れる協働存在として当事者を捉える新たな当事者論が提示された。